

隨泉寺寺報

2002年 12月号 第388号 082-892-0217

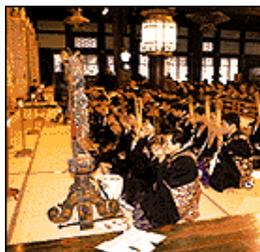
浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

報恩講法座

講師 住職自修

講題 「報恩講について」

報恩講をお勤めするのは、念仏のみ教えを喜び、味あわせていただくとともに、そのお念仏の教えをおすすめくださった親鸞聖人のご遺徳のほどをしのぶためですが、浄土真宗の報恩講の始まりは、親鸞聖人お手紙の中に仰せのように、師法然上人のご命日に「法然上人の二十五日のお念仏」をおつとめになられた事がおこりと受け取られます。しかしながら、今日の報恩講のように、親鸞聖人のご命日にちなんでおつとめするようになったのは、第三代・覚如上人のころからで、上人は永仁二年(1294)の冬、親鸞聖人の33回忌法要の時に報恩謝徳のためにと『報恩講式』を作られ、つづいて宗祖親鸞聖人御一代の絵図と『御伝鈔』で聖人のご一代の物語をつづられ、ご苦勞を偲ぶ手がかりを製作してくださいました。ご本山西本願寺では毎年1月9日から16日まで御正忌報恩講がいとなまれ、各寺は年内にとり越して勤め、門信徒の家庭でも、親鸞聖人のご恩をしのび、大切につとめるのが、慣わしです。



12月の行事予定

12月 2日午後 6時より・・・本部役員会
12月 14日昼席 午後1時より・・・報恩講法座
12月 15日朝席 午前9時半より・・・報恩講法座 おとき
12月 15日昼席 午後1時より・・・報恩講法座

門信徒会總會

11月15日 門信徒会總會が開催され、平成14年度の活動報告と決算並びに明年度の行事予定と予算が審議されました。来年度から会計年度が4月1日から3月31日までに変更になります。今年度は変則的に平成14年11月1日から平成16年3月31日までの17ヶ月の会計年度になります。先月報じましたように保険料が高くなったので予算が組めません。それで平成16年から4000円に会費が変更されました。大変なご負担をかけて恐縮です。火災保険が年間120万円ですので、それを門信徒みんなでご負担するというご理解ください。今年度はそれに向かって移行期間で、2000円で17ヶ月ということになります。よろしくお願ひします。

菊と絵画展

11月8日(金)午後1時より15日まで菊と絵画展を開催いたしました。



井原地区の菊を作っておられる方々をお願いして、丹精こめて作られた菊の花を、庭や山門まえに飾っていただきました。大変好評で、門信徒法座に来てくださった沢山の方々も楽しんでおられました。同時にこの近くで絵画を楽しんでおられる方々の作品を展示していただきました。どの作品も感動が伝わってくる魅力的な作品ばかりで、8日の開会式では「菊作りとそのころ」といった 菊を作る苦労話

を井原の浜野博寿さんに、「絵画の楽しみと描き方」を椿谷通俊さんに話していただきました。菊を育てることも、作品を描くことも、子供を育てることと同じ事だということがよく分かりました。愛情を持って、しかし甘やかすぎず、かといって手を抜かず・・・私が一番感動したのは、すばらしい花や作品を育てるには、まず根や下地が大事だということです。表には出てこないけれども、それを支える根や下地が張っている事が大切と、うかがいました。まず土から作っていくことです。立派な子供を育てるには、まず家庭から、いや親を育てることなのではないでしょうか。そういえば東井義雄先生の本に『根を養えば、木はおのずと育つ』という本があった気がします。

除夜会並びに修正会案内

今年も例年のごとく除夜会(除夜の鐘つき)をいたします。11時15分から本堂でお勤め、11時30分前後から鐘の前でお勤めのあと、除夜の鐘をつきます。誘い合わせてお参りください。毎年300人前後の方が鐘つきに参られます。108までに参られるためには、少なくとも12時までにお越しください。鐘の前で焚く木がありましたら、持ってきてください。お願いします。

祖父との思い出

七竹 真吾

今年の1月28日、祖父馨は84年の生涯を終えました。多くの人々に支えられて、幸せな人生だったと思います。今回は、祖父との思い出について書かせていただきます。

私が物心ついた頃には、祖父は腎臓病を患っており、常に病気と闘っていたのですが、若い頃から病弱であったためか病気とうまく付き合っていましたし、自分の健康管理のためもある程度規則正しい生活をしていました。そのためか、私たちが些細なことで心を乱し、自分を追い詰めていってしまうのに対し、祖父は常に心を落ち着かせて、自分のペースで日々を過ごしていました。

私が幼い頃は、よく祖父の家に行き、大声ではしゃいでいましたが、怒ることもなく笑って眺めていた祖父の姿を今でも思い出せます。私の質問にはていねいに答えてくれるし、多少の悪さは大目にみてる心の広いやさしいおじいちゃんでした。祖父が怒ったり動揺している姿は思い出せません。だからこそ、入院中に祖父が痛がったり、だんだん手足が細くなっていくのを見るのは辛かったです。そんな苦しい時でも「気を付けて帰れよ。」と私たちのことを気づかってくれるやさしい人でした。

祖父が亡くなった後、祖父との思い出を一つ一つ思い起こしてみました。どの思い出も心の安らぐものばかりです。そして祖父から、自分の自我ばかりを主張するのではなく、穏やかな広い心で物事を見たり接したりすることの大切さを教えられたように思います。祖父の教えを大事にして、これから生きていきます。

入院中も多くの人々に助けをいただいて、祖父も感謝しておりました。この場を借りて御礼申し上げます。これから私たちも頑張っていきますので、どうぞ温かい目で見守っててください。



『日本一の砂時計』

今年も残りわずかとなりました。一年のたつのが早いこと。今年は何をしたのかと思っています。11/12が終わって残りはあと1/12 あと一月です。

島根県の仁摩町というところに、サンドミュージアムという施設があります。砂の博物館です。仁摩町の近くの海岸が、鳴き砂で有名な琴ヶ濱です。石英分が多いのか、とても白くてきれいな砂です。歩くとキュウキュウと、きれいな音を立てるのです。ですからその砂に因んで、あの元総理の竹下登さんが提唱した、ふるさと創生資金という一億円を基に、作られた施設です。

その一番の呼び物が、日本一いや世界一大きい砂時計です。一年間かかって砂が落ちていきます。数年前にこれを見た事があります。八月だったので半分以上、下に落ちていて、残りのほうが少なくなっていました。

そしてそれが片時も休まず、砂が落ちていって、残り時間が無くなっていくのです。考えさせられました。自分の人生の持ち時間はあとどれくらいなのかと。今も片時も休まず、持ち時間は失っていきま

す。出来ればもう一度見に行きたいと思っています。それも12月の31日が、1月1日。

12月31日は全部なくなって残りあと少し、人生の終末。そして1月1日は新しい一年の始まり。新しいいのちの誕生。

砂時計は全部落ちれば、またひっくり返して、新しい時間が始まります。しかし残念ながら、人間の持ち時間はひっくり返されません。また砂時計は残り時間が目に見えますが、人生の残り時間は目に見えません。あとどれだけ残っているものなのやら。しかしそれが仮に見えたら、これも少しあまり気分のよいことでは、ないかもしれませんが・・・。

